

3 2009
March

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.162



「三匹の子豚 2009」制作 教育学部学生 今 友里華

I 巻頭言 2

弘前大学長 **遠藤正彦**

II 特集 卒業・修了・退職にあたって 4

人文学部	4
教育学部	7
医学部医学研究科	9
医学部保健学科	11
理工学部	13
農学生命科学部	15
保健管理センター	18
事務局・附属病院	19

III 海外だより 25

IV 第4回「言語力」大賞コンテスト 27

V 新任教員自己紹介 29

VI けいじばんコーナー 29

VII 編集後記 30

特集

卒業・修了・退職にあたって



I 巻頭言

弘前大学の学生の質は向上しています。 卒業生・修了生の皆さん、おめでとうございます。



弘前大学長
遠藤正彦

本年3月、本学各学部を卒業され、又は大学院を修了される皆さん、卒業並びに修了し、学位記を授与されましたこと、誠におめでとうございます。皆さんのこれまでの努力に敬意を表します。

私の目から見ると、7・8年前の卒業生・修了生には申し訳ありませんが、今年の卒業生・修了生は以前とは違って見えます。明るくて自信に満ちているように見えます。

7・8年前、地方の大学は、おしなべて貧しかったのです。そこには、地域間格差や大学間格差があっても、特に取り立てて問題にはしませんでした。当然視されていました。おおらかだったのです。

平成16年国立大学法人化の前の国立大学長会議の席上、私は地方大学の学長の立場から、「地域間格差や大学間格差を解消せずに、国立大学法人化には問題がある」と、文部科学省に迫りました。しかし、特別な解決策が示されたわけではありません。国立大学法人化の意味するところは、競争と評価であり、行きつく先は各大学の自主・自律であります。資源の乏しい弘前大学にとっては、体力の極端に違う大規模大学とのマラソンであり、勝負の既に決まったスタートでした。

こうして弘前大学の出来レースは始まりました。しかし、学長の呼び掛けに、弘前大学の将来に危機感をいただいた教職員は呼応しました。大学の校舎は整備されました（教育学部と保健学科の整備もそう遠くありません）。キャンパスは、見違える程にきれいになりました。今では、平日夜も、土日も、キャンパス内を闊歩する元気な多くの学生の姿がそこにはあります。

講義も変わりました。学生による授業評価が導入されました。しかし、この評価がもっと厳しかったら、講義はもっと変わっていたかと思います。さらに、卒業論文や

修士・博士論文で、国際誌に掲載されたり、学会賞を受賞する学生が多くなりました。

学長直言箱への投書で一番多いのは、学生の皆さんの講義に対する不満でした。それだけ学生の講義に対する関心が大きくなっていることを示していました。

大きく目を見張るのは、何といたっても就職です。7・8年前、学生の就職が全国的に低迷している時、本学も御多分にもれず低就職率を示していました。しかし、平成20年3月卒業生の就職ランキングでは、公表のない医学科と保健学科を除く全学部が、即ち、人文学部、教育学部、理工学部及び農学生命科学部が、全国ベスト10に入りました。これは、学生の就職モチベーションを高めることに努めた就職支援センターと、各学部の就職担当教員の努力と見ています。

就職率が高いことは、社会が本学の学生の価値を認めていることとなります。加えて、医学科と保健学科の関わる国家試験も高合格率です。これらは7・8年前と大きく変わっているところです。

学生の課外活動も一層活発になってきました。それは、年ごとに学生自身の参加と市民の参加が増加する総合文化祭がそれを物語っています。体育系も文化系も東北地方の大会はもとより、全国大会でも好成績を収めています。

地元の新聞は、連日弘前大学のことを取り上げています。地元弘前市民が、自分らと生活の場を同じくする学生の動きに関心をもっています。学生のボランティア活動に拍手を送っています。

7・8年前に比べて、弘前大学の学生はこうも変わりました。私は社会に向かって、本学の学生の質を保証しますと明言しました。その通りに成りつつあることに、学長として自信を持っています。



この3月弘前大学を定年御退職の皆さん

教職員の皆様、定年御退職おめでとうございます。

皆さんありがとうございました。

度に臨み、御退職する者として見ると、皆さんには、“やったな！”という感慨がわいているのではありませんか。そこには、悪条件の中から完成度を高め、自律性を高めてきた弘前大学の存在を感じているでしょう。

すべてが博士課程に直結している5学部からなる中規模総合大学、人文学部・教育学部・理工学部・農学生命科学部の4学部が全国ベスト10内の高就職率と、医学科・保健学科の国家試験高合格率であることから示される質の高い学生、施設が完備、図書館、附属病院、遺伝子・放射性同位元素・動物実験・機器分析等の施設・センターは言うに及ばず、出版会、臨海実験場、地震観測所等に、大規模大学が特に持つ大学附置・附属の施設は、小さいなりにもすべて完備しました。

しかも平成21年度の概算要求、20年度の補正予算は、本学に国立大学として初めての緊急被ばく医療を担う、全国第7番目の高度救命救急センターと、全国初の自然エネルギーの研究センター、そして完成時には我国最大規模となる植物園・白神自然観察園が含まれています。

弘前大学は、将来に渡って新幹線の通じない地方中都市弘前市にはありますが、地方に密着した、自立性のある完成度の高い中規模総合大学へと、着実に変化してきました。

学長は、この度御退任の皆さんに心から感謝しています。ここまで弘前大学を引っ張って来たのは、それぞれの部門のリーダーとしての皆さんのお陰であると感謝しています。皆さんも最初に申し上げた様に、「自分はやったな」との思いをお持ちと思います。

これから第1期中期目標・中期計画の評価が出ますが、きっと皆さんのお陰で生き残れるでしょう。そして、創立満60周年記念式典を声高らかに祝えることになると思います。

ただ、皆さんへのお願いがあります。御退任後も大学へ足を運んで、大学の変化を見守っていただきたいことと、後に続いている後輩に、本学発展のため、もっと力を尽くせと励ましをいただきたいと思います。

皆さんには、弘前大学の応援者として、今後とも御健勝で御活躍下さいますよう祈念申し上げます。皆さん、本当にありがとうございました。

卒業生・修了生の皆さんは、これまで学んで来た弘前大学に自信と誇りを持って下さい。今年は弘前大学創立60周年の記念すべき年です。この60周年の歴史と伝統にも誇りを持って下さい。

そして、弘前大学の60周年以後の更なる発展のため、社会において、弘前大学の後輩に手をさしのべることに、それぞれの同窓会と後援会で、母校の支援活動にも力を貸して下さい。弘前大学の更なる発展は、皆さんの更なる自信につながるでしょう。

皆さんおめでとう。皆さんの活躍を期待しています。

本年3月末日をもって、定年御退職の教員及び事務系・技術系の職員の皆様、定年御退職、誠におめでとうございます。そして誠に御苦労様でした。

皆さんは、この平成21年という、弘前大学にとりまして誠に重要な節目の時に御退職となりました。それは、弘前大学が昭和24年に創立されて、今年で満60年に当る年だからです。この60年の歴史と伝統を育て、そして確かなものにしてきたのは皆さん方です。それまでには、大学紛争、大学設置基準の大綱化による大学改革、そして、国立大学法人化がありました。その国立大学法人化の真只中に身をおいた皆さんが、この平成21年のこの年、この第1期中期目標・中期計画の最終年度、そして評価の年に御退職となりました。

この5・6年を思い返して見ただけでも、そこには大変な、そして目まぐるしい変革がありました。競争と評価が前提の、そして行きつく先は自主・自律の国立大学法人化でした。しかし、その出発の時点においてすら、地域間格差と大学間格差が厳然とありました。

少子高齢化・過疎化が進み、脆弱な産業・経済基盤の地域を立地とし、運営費交付金の1%効率化係数による減額、総人件費抑制策による人件費5年5%の減額等、過酷な状況の中を、皆さんは、これに良く耐え、学長と共に、時には地を這い、時には崖をよじ登ってきました。

今、創立満60周年の、そして国立大学法人中期目標・中期計画の第1期の最終年



Ⅱ 特集 卒業・修了・退職にあたって

学部、大学院を卒業、修了する代表、並びに38名の定年退職者のうち22名の方から寄稿いただきました。



思想文芸講座

教授 村田俊一

定年を迎えるにあたって、過ぎし日を懐かしむことは、自らの人生を独りよがりやりに完結してしまう寂しさが付きまとうものである。しかし、私の思索の拠り所としてきた詩人 T. S. エリオットは、「現在」の我々が、「過去」を思うことは「未来」に関わることであると言う。この時間の観念によるなら、将来のあるべきものの姿は、過去を完結したものとして切り離すのではなく、流動的な糧として取り入れるべきものと考えられる。

26年前、幸運にもこの弘前大学に赴任したその当時、人文学部には、旧制弘前高校の一端を偲ばせる独文、仏文、そして古典学を含む20ほどの教室があり、ここで伝統的な講座制の名残を留めて研究と教育が行われていた。私

「伝統」と「革新」の狭間で

の英米文学の教室も2名のスタッフだけで、自分の専門にとらわれることなく講義、講読、演習、そして、学生の卒業論文の指導が行われた。授業形態は旧態依然として新しい工夫もなかったが、教室には研究と教育の一本化が生み出した学生と教師の一体感があった。ここにある信頼感、そして温もりは教室外の自主的な学生の活動にも表れた。桜の下での新入生の歓迎コンパ、夏の読書会の合宿、卒論発表会、そして追い出しコンパと、今も変わらぬ学生時代の風景であるが、この当時の学生には自らの専門を自負し、それを通じた先輩、後輩といった学生同士のつながり、連帯感がみなぎっていた。このような彼らの学生生活には大らかな、それでいて骨太の「古きよき時代」の豊かさがあった。皆、生き生きとしていた。

その後、大学改革が起こり哲史文といった今までの学問的な名称、領域は消え、研究と教育は分断され新しいカリキュラムになった。「英米文学」も「文化研究」の名の下に姿を消し、昔の人文学部の面影はなく、目に見えぬ世界が軽んじられつつある。世の中が変わったのだ。学生も変わった。大学の理念がこの世の推移に合わせて変わって行

くのは忍び難いことだが、大学が存続し発展するためには、大学に対する従来の考え方を換え意識改革が求められるのは当然のことであろう。これは年老いて行く者にとってはつらいことであるが、この革新なくしてはこれからの大学のあるべき姿は望み得ない。

しかし、このようなことを目の辺りにすると、今では忘れかけた「温もり」、「豊かさ」、そして「孤高」を持った「古きよき時代」への郷愁に駆られることがある。ここには、今の大学が見失いがちな大切なものがある。これを改革の名の下で感傷として一笑することはたやすいが、この古きよき精神を温存し育んで行くことも大学の使命である。

大学での学生生活を終えた今、これらのことを鑑みると、私の思い描く理想の大学は、この「古きよき時代」の「伝統」と独自の発想を持った「革新」との狭間で、真に新しい大学の研究と教育のあり方を模索する姿である。この「伝統」と「革新」の共存は、単なる日和見主義的な妥協ではなく、理念(想像力)と現実把握を必要とする「統合」の道である。この弘前を去るにあたって、大学のあるべきこの姿を弘前大学に託しつつ、最後に皆様のご健康とご活躍を心からお祈りします。長い間、ありがとうございました。



人間文化課程

岩佐良子

この四年間、自分とは何者で、「大人」になるという事はどういう事なのかという事をモヤモヤとずっと考えていた。

マージナルマン

それは就職活動にも影響を及ぼした。自己アピールの際、まだモヤモヤとしたままの自身のイメージを無理矢理言葉にして、無理に笑顔を作り、ある程度「受け」を意識して無理に言葉を発し続けた。半年後、笑えなくなってしまっていた。内定を得た後、改めて自身の目指すものとの方向性の違いと、内定を貰う事だけに必死になりすぎていた自身の醜態、自身が最も嫌悪していた事を躊躇いつつも続け、いつの間にかそれに馴れてしまっていた自分に気づき、内定を辞退した。父の後押しもあっ

て、再度自身の希望する職種にチャレンジする事にした。今はそれに向けて準備をしている最中である。

結局、四年間考え続けた事の答えは明確に出せないまま、今のところ「自分が嫌悪感を覚えるような人間にはなりたくない」ともがいているのが「私」なのかもしれない、「なのかもしれない」で保留である。今簡単に出来るような答えは、その場しのぎの嘘になってしまうような気がする。私は生まれてまだ20数年たらず、これからまだまだ学ばなければならぬ事ばかり、考える時間もある。出来ればこの先この四年間に思った事を忘れずに年を重ねていきたいと思う。



現代社会課程法学コース

横山彩子

「ねえ村松、4年前にこの大学に入学したこと覚えてる？」

「それは忘れてないよ。入学した時にこの『学園だより』にも2人で登場したよね。」

「そうでしたそうでした。で、この4年間はどんな感じに？」

「留学、旅行、ボランティアとやりたいことをして充実してたと思うよ。留学したら一年残ることになってしまって今、就活中だけどね。」

「私は研究活動で全国そして世界を飛び回ったわ。学校にも随分泊まって作業した。」

「学校に泊まってまで！？さぞハード

私たちの4年間(後編)

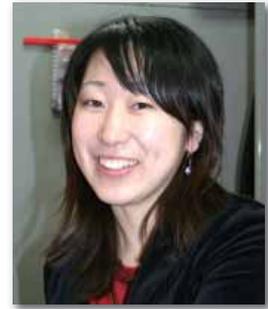
なぜミだったのね。研究活動ってどんな内容？」

「受託研究、地域貢献イベント、新聞連載、学会発表、研究雑誌編集と、大学人がやることは一通り。研究室がキビシメの方針でね。課外活動としては津軽三味線、よさこいにチャレンジしたわ。」

「文化祭の時忙しそうだったもんね。」私も少林寺拳法部で黒帯とったり、英語サークルに参加したり、社会調査実習をしたりで忙しかったけど楽しかったな。彩子は大学生活でやり残したことある？」

「もっと本を読んでおけばよかったと思うよ。活動と自省の反復が大切。あとね、4年間もいたのに街のことを案外知らないわ。グルメ巡りや地域活動もやり残した。だから村松はしっかり寝て、食べて、街で遊んで弘前を満喫してね。」

「読書は本当に大事よね、私はあと一年、英語力の向上を目指すわ。みんながいなくなっても寂しさには負けないよ



現代社会課程社会行動コース

村松裕希子

うにしなきゃ。」

「そうそうその調子。この『学園だより』を読んで、みささん、やり残したことをしっかりリストして実践することをオススメするわ。」

「卒業する彩子に大学が一つだけ願いを叶えてくれるとしたら、どんなお願いしたい？」

「じゃあ、人間ドック&治療メニューを。4年間も休みなく活動して、一人暮らしの身にこたえました。『不健康』は世界保健機関が憂慮する最大の問題の一つなんで。」

「どうかお大事に(笑)。みなさんも、ご卒業おめでとうございます。」



経済経営課程

木田 宙

弘前大学における4年間で得たものは数多くあります。それは講義等で得た知識であり、サークル等で知り合っ

成長と反省

た仲間でもあるのですが、4年間を通して「良くも悪くも自分を知ることができた」ことは最も大きな収穫です。

私はこれまで自分から積極的に人前に入る方ではなかったのですが、サークルのキャプテンをしたことや、ゼミの活動の影響で、人前で話す機会が多くなったこともあってか、少しずつ人前に入ることをためらわなくなりました。これは大きく成長できた点かと思えます。

しかし、悪い点も多く気付きました。目標を達成する力が弱いことや、計画が曖昧なまま行動に移してしまうこと

など、直すべきところはまだまだたくさんあります。今まではそうでもよかったのかもしれませんが、サークル運営を担うようになり、自分の決定の遅さや計画性の無さがチームに迷惑をかけるということ、身をもって知りました。その際には、周囲の人が自分を支えてくれたことで乗り越えることができ、今思えば助けられてばかりだったと感じています。

自分の成長したところ、まだまだ未熟なところを知ることができた大学生活。これを今後の糧とし、周囲の人への感謝を忘れずに、社会人として精一杯頑張りたいと思います。



保健体育講座

教授 伊藤武樹

私が南国宮崎大学から雪国弘前大学に転任して早7年。その間大病を患うこともなく定年を迎えることが出来、見かけ上の健康者である私にとっては奇跡といえます。

44年に渡る奇跡の要因は何かと問われれば、一に家族、二に職場の同僚と即答するでしょう。特に弘前大学での7年間については、保健体育講座の同僚や教育学部の多くの皆様に支えられ、心地よい環境の中で教育と研究を楽しむことが出来ました。この7年間は、弘前大学にとっての私の存在価値は何

「たとえ明日、この世が終わろうとも、私は林檎の木を植える」L. Martin

か…① What am I? ② What should I do? ③ What shall I be?…への自問の日々でした。それは今も続いています。

ただ、健康教育という専門領域に限って自答するならば、以下の点に集約されます。

まず青森県民の健康教育にとって本教育学部が責任を持って獲得させるべき力は何かをみました。その結果明らかとなったのは、最優先すべきは1965年以降47都道府県の中でも常に最下位グループに甘んじ続けてきた、青森県民の平均寿命(保健方策と社会方策の総合指標)を全国平均にまで伸ばす教育の必要性でした。つまり、健康にかかわる知識・スキルというものを最新の健康科学や教育理論を駆使し、県民的教養として獲得させることです。特に、21世紀の国民的健康教養としてWHOが提唱するHealth Promotion理論を用い、まずは県民の健康観を

Illness modelからLife modelへとパラダイム・シフトさせることです。しかし、いくら健康観を変えたとしても、県民がLife modelを実現化するための力を持たなければ教育としての意味はありません。そこでHealth Promotion理論の実践的教育モデルとして注目されるPRECEDE-PROCEED modelを用い、繰り返し義務教育を通して獲得させることが必要不可欠だと考えます。健康観のパラダイム・シフトと実践力のどちらが欠けても生涯に渡って健康に生き続ける力は獲得されません。

以上のことから、北東北地域の健康教育の必要性を考えた場合、主体講座である保健体育講座に健康哲学・健康思想を持った保健科教育の専門教員を複数配置することが緊急課題といえます。その対策こそが青森県民の健康力向上にとって必要不可欠な教員養成学部の責任であるといえます。



学校教育教員養成課程

神山裕理

地元の栃木県を離れ、弘前に来て4年という月日が経とうとしています。弘前大学での4年間は私を大きく成長

弘前での充実した4年間

させてくれました。これも、支えあい励ましあった友人をはじめ、指導教員の先生や弘前独特の環境のおかげです。私は4年間、教員になるための勉強や実習をしながら、音楽サークルに入り、演奏活動を行っていました。毎年、夏休みには近隣の学校をまわって演奏会をし、子どもたちの興味や関心を肌で感じてきました。この時の体験は、教師になりたいという意志をさらに強くするものとなり、友人と支えあいながら色々なことを経験してきたサークル活動は自分を成長させてくれました。

また、弘前で感じる四季もまた私を強くしてくれました。特に、冬の寒さや雪は、自分の意志をしっかりもちながら生きていく強さを教えてくれたような気がします。ちなみに、最初は聞き取ることが困難だった津軽弁も今では、とても愛着を感じています。

最後に、私にとって、この4年間は言葉では言い表せないくらいとても充実しているものとなりました。私に学ぶ機会を与えてくださり、成長させてくださった方々に感謝しながら、人の温かさを忘れず、弘前大学で経験してきたことや学んだことを活かし、前を向いて歩いていきたいと思っています。



生体構造医科学講座
教授 **加地 隆**

18年前、旭川医大から赴任。温かい先輩の諸先生方のお陰でスムーズにスタートができ、期待に沿うべく精一杯頑張った。丁度世代交代の時期に当たり、沢山の委員会の仕事を拝受し、また御遺体収集を含む解剖学の膨大な教育関係の義務、そして大学院生の教育を含む研究等で、体力的にも大変であった。しかし、幸い教授会の同僚も、教室員も、学生諸君もとても良い雰囲気気で迎えてくれたため、なんとか乗り切ることができた。個性溢れる教室員

「弘前大学を去るにあたって」

との交流はなんといっても愉快的思い出である。また、最初の頃は唐牛助成金など研究費に恵まれ、また臨床からの大学院生などの援軍もあり、皆一生懸命に努力してくれたため、良い実験結果に恵まれたことは有り難いことであった。その他に思い出に残ることとしては、やはり学生諸君や他の諸先生方との協力行なったこと：学生のクラブ活動や顧問の先生方との交流、慰霊関連施設の移転・建設や行事に関すること、第1回・第10回国際フォーラムの主催、ハバロフスク訪問等の国際交流、弘前医学会のシンポジウム、毎年の実習やコンパでの学生諸君との交流、東日本医学生体育大会や医師国家試験での好成績、新校舎等々、充実していた。後半は研究費不足等で十分に実験ができず、また書類書きも多く、苦しんだ。最後は八方塞がりの状況ではあったが、残された力を振り絞って、毎朝6時から8時迄、正月もお盆休みも

なく5年間ほど、単純ではあるが未開の領域での長期間の継続を必要とする実験を自ら行なった結果、幸運にも重要な発見に恵まれ、救われた気持ちがしている。

後輩へ：天は自ら助けるものを助ける。人それぞれに良いものを持っているはずなのでそれを十分に生かして、それぞれが天から授かった使命を果たすべく人生を歩んで行ってほしい。しっかりとした基盤に立って、広い視野のもとに、粘り強い努力を継続して、何事かを成し遂げられんことを。

大学の存在意義は研究と教育。この大学から今後1人でも多く、新事実の発見、新概念の創出、メカニズムの解明など学問の発展に貢献する人の出てくれることを、そしてまた、しっかりとした考え方、専門知識を身につけた卒業生が幅広い視野と温かい人間性をもって社会に貢献してくれることを祈っている。

大好きな弘前大学へ

医学科
石原 佳奈

運命だと思いました。6年前、私は弘前大学に呼ばれたのだと思っています。思えば本当に色々なことを経験させていただきました。医学部硬式テニス部では毎年山中湖で熱い夏を過ごしました。たくさんの先輩と後輩とのあの団結力は忘れられません。国際医療研究会ではタイに4回も行きました。今もタイとの交流は続いています。新

たに再生した医学部学生自治会では大好きな弘前大学がもっともっと素敵な大学になればとアンケートを取ったり、先生方との懇話会も行ってきました。後輩たちがその意思を引き継いで楽しく活動してくれています。自ら立ち上げた社会医学研究会「ほっと」ではわずか5人の部員も今では4倍になりました。そして、私は4月から弘前大学医学部附属病院の研修医となります。次の目標は、附属病院を元気にすること。やりたいことがたくさんあります。きっと楽しい研修生活になること間違いなし！

やりたいと思ったことはやる。それ

をモットーに6年間をつっぱしってきました。自然と次々やりたいことが見つかるようになり、名古屋出身の私ですが、青森県でお世話になりたいと思うようになりました。ここにはたくさんの出会いと可能性があると感じたからです。

大学生活は、楽しめばすごく楽しいものになるし、つまらないと思えばつまらないものになってしまいます。弘前大学にはたくさんの可能性があると思います。もっと元気で笑いの絶えない大学になったら楽しいので、私はこれからも走り続けていきたいと思えます。6年間お世話になりました。そしてこれからもよろしく願っています。



健康支援科学領域
教授 三浦秀春

「転機(crisis)」に恵まれて

「定年」という人生最後の「転機(crisis)」に臨むことになった。「転機(crisis)」には、予測可能であったり、予定されているものもあるが、予測も予想もできない類のものもあるし、振り返ってみてあれが「転機(crisis)」だったのかな、と思えるものもある。

退職に当たって33年と11ヶ月の在職期間を振り返れば、人生の半分以上を「医短」の成長発展と共に歩んできたことになる訳で、その節目節目が私の人生の「転機(crisis)」ともなっている。

昭和50年5月、新設の「弘前大学医療技術短期大学部」の「教養科」の講師として着任以来、所謂「医短」は平成12年10月には「弘前大学医学部保健学科」となり、平成19年4月からは「弘前大学大学院保健学研究科」に発展した。

その間、「医学部保健学科」に変わる時が個人的には一大「転機(crisis)」であった。教養科目の「哲学・倫理学」担当の延長で「人文学部」等に移るのか、「医学部保健学科」の専門科目担当者として「残る」のか、と言うよりも以前に「残れるのか」という岐路に立たされることになった。「残れるのか」という面では、当時の関係の皆様には多大のご苦労とご配慮を戴き、いまだに感謝の念に堪えない次第である。

実は、「残る」という私の意思に関しては、迷いはあったものの、既に方向付けられていた。というのは、教育・研究上でも、「医短」赴任の翌年に個人的にはひとつの「転機(crisis)」を経験していたからである。

昭和51年4月2日の朝刊の紙面には「死め権利」認む」という見出しが黒地に白抜きで印刷されていた。所謂「カレン裁判」の「安楽死」（現在では「尊厳死」と考えられている）容認の報道であった。新学期の構想を練らなければ等と考えていた身には、まさに青天の霹靂のように、医療従事者になる学生に対して、これまでのような「教養の哲学・倫理」のままではダメだという思いで震撼を覚えた。この記事が「転機(crisis)」となって、以来、医学哲学・医療倫理の分野の延長上に「HOMO CURANS」（ケアする存在）と言う人間観への道を歩むことになり、今になれば、それが「残れる」結果につながったのかと思える。

顧みて、「転機(crisis)」の先は誰も予測し得ないが、これまでの「転機(crisis)」を「好機(chance)」にしてくれた弘前大学と事務の方々を含む同僚諸氏への感謝の念に堪えない。

大学生活



放射線技術科学専攻
藤田里美

大学生活はあっという間でした。
1年の時は、わからないことばかり

でどきどきでした。初めはすべてのことに慣れなくて、緊張した生活を送っていましたが、クラスにも友達ができ、サークルに入ったことでサークルの先輩や友達とのたくさんの出会いもありました。サークルで他の学部の人とも交流でき、いろいろな体験を通して人間的に成長できたと思うので、本当に入って良かったと思っています。仲のいい友達もでき、高校の時よりも活動的になり充実した生活を送ることができました。

2年からは、専門科目の授業も増え、

一生懸命頑張っている人の刺激を受け、勉強にも力を入れるようになりました。また、アルバイトも始め、仕事の難しさを知り、社会勉強にもなりました。

3年の後期になってからは臨床実習が始まりました。実際にこれから私たちがすることになる仕事の様子を見せて頂けたことは、とても貴重な体験でした。授業で習ったことなのに内容が思い出せず、勉強不足であったことも思い知りました。また、患者さんに対する気配りの大切さも学びました。就職してからも大学で学んだことを生かし、頑張りたいと思います。

そして、4年間お世話になった先生方、友達、両親に感謝致します。



理工学研究科
教授 **雨森道紘**

弘前大学・学生のためにそれまでにない4つの新しいことをした。時系列的に言えば、最初は「情報処理演習」教育の全学必修を可能にしたことである。現在の「21世紀教育」の前身は「共通教育」であり、これは教養部廃止とともに大学内にそれに変わる全学体制の教育組織を改めて構築したものであった。いまから約14年前のことである。そのころ教養部の「情報科学」科目への履修には台数による人数制限のため朝早くから列に並ばなければ履修できないというほど希望者が殺到していた(?)らしい。(娘のための並んだ保護者の苦労話として後に仄聞した。)時代は情報化社会へと急速に進化し始めていた。共通教育実施に遡ること7～8年前から理学部にも「情報科学」創生の目論見もあり、私は、そのころ理学部からの内地留学で北海道大学情報処理教育センターに1年間厄介になっていた。そこで最初に全学生履修可能の百数十台の計算機実習機器を見た時の驚きは今も鮮明である。大きな大学では、こ

「不条理の先」

のような学習の機会が確保されているのにたいして、地方大学ではその機会さえも少数者にしか与えられていない。その時の不条理の思いが後の行動の原点となる。それから時代は情報社会へとまっしぐらに進んでいる中で、弘前大学は新しい時代の「共通教育」を打ち立てようとしているにも拘わらず、その構想企画委員の中に、誰一人として計算機教育に関連する教官やその緊急充実性を主張する委員がいなかったのである。不思議というか、時代に鈍感というしかない。私は最初に「情報処理分科会」の代表として、後に運営委員会委員として運営に参加し、この科目を「全学必修」をすることを提案した。その後は大変であった。No!No!ノー！出来るわけがない！のオンパレードである。助手教官を含めた全学理系教官の協力やTA制度などを盛り込んだ実施構想を打ち立て、最後には当時の手代木学長に直訴する格好となった。私のモチベーションは学生の履修権利の獲得につきた。殆ど罵倒しあって当時の委員長他多くの方々にご迷惑とご面倒をおかけしたが、とにかく構想は実行された。最初の学生のアンケートの中に「今は大学に行くのが楽しくて仕方がない。それは計算機を自由に使うことができるからだ」という感想文を読んだときに、それまでの疲れが全身の喜びに替わったのを記憶している。

2番目は、大学で初めての「保護者懇談会」開催である。当時理工学部の学務主任をしていたことから、委員会にこ

れを提案したのだが、「時期尚早」であるとの反対である。「必要な事」は常に時期尚早との戦いである。一旦否決された案が学部長指し戻しで委員会に戻ってきた時には、強引に実行することを了解戴いた。全事務方、関係教員、必要性を感じていた教官からの情報や、JTBとの連携など裏方として応援してくれる方もおり、ともかくも第一回を成功裡に終えることができた。組織構成、当日の分刻みのスケジュール等は、その後の他学部からの照会にも参考資料として提供することが出来た。

3と4は、図書館長を併任した時の「学術講演会」と「言語力コンテスト」の実施である。第2回目の講演者の青木保氏は後に文化庁長官に就任された。「言語力コンテスト」には文学作品募集ともう一つプレゼンテーションのコンテストを企画した。プレゼンテーションとは、各基礎ゼミでの成果を発表させる構想であった。学生が現在の基礎ゼミにモチベーションを持てるようにし基礎ゼミを活性化させることを目指した構想であった。2年目からは図書館を利用した本格的な構想を実行しようとしていた矢先、出張中に心筋梗塞を患い2ヶ月後に図書館長を辞した。文学コンテストは好評で今も続いているが、基礎ゼミとの関連構想は夢と消えた。体力は、それなりに回復したが、最後の時来たれりである。余人は知らず、自分では母校に幾ばくかの貢献が出来たと思っている。これまでお付き合い戴いた多くの教職員および学生の皆さんにも感謝するのみである。

弘前大学を去るにあたって

理工学研究科 研究協力係
主任 **工藤 靖宏**

お世話になりました。
ありがとうございました。

振り替ってみれば、あっという間の32年間でした。
多くの方々なたすけられ支えられながら今日の日をむかえられる事が出来、本当に感謝しております。

様々な出来事がありましたが、今思いかえして見れば、すべて懐かしい良い思い出となりました。

これからはゆったりとした自分の時間を味わいたいと思います。

長い間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。



生物学科
教授 小原良孝

弘前大学理学部生物学科に助手として赴任したのが1974年3月でしたので、この3月で在職35年になります。楽しくもありつらくもあり、長いようであっという間の35年でした。この間、「哺乳類の系統進化」をテーマとして染色体研究を進めてまいりました。モグラ目食虫類の核型進化、イタチ科食肉類の核学的関係、核型から見たヒナコウモリ科コウモリの系統進化など、無我夢中の研究生活でしたが、振り返ってみればその成果は微々たるもので、

弘大退職にあたり

細胞遺伝学・系統進化の分野に幾ばくかの足跡を残せたかなといった程度であります。そのような総括ではありませんが、私の研究室に所属し一緒に研究を進めてくれた卒研生たちが東京大・京都大・東北大・北大・理化学などあちこちの大学・研究所で第一線の研究者として活躍するようになっており、指導教員としてこれほど嬉しいことはありません。「生物教育」に関しては、在外研究で不在となった1991年を除き34年間1回も欠かさず深浦での臨海実習を担当し、これだけは他にひけをとらぬ教育貢献をしたと自負しています。臨海実習（動物系統分類）は「生物の多様性」を体得できる生物学科のコア的科目であり、来年度よりこの科目が消えてしまうのはこの上なく残念なことであります。

一昨年、文京キャンパスに「弘前大学サイエンス・パーク」が創設され、学部玄関ロビーに各種標本が展示されましたが、本学部ではこれに呼応する形で

昨年4月、一階104号室に標本展示室が整備され、旧農学部及び旧理学部生物学科の剥製・展翅・液浸・骨格など各種の標本が一括収蔵展示されました。昨今は全国的にも講座制がなくなる傾向にあり、退職した教員の貴重な標本がいともあっさり廃棄されたり、博物館に寄贈されたりして大学が持つ知的財産の喪失が問題になっています。私がこれまでの研究で使用した哺乳類のさまざまな標本も青森県郷土館にでも寄贈せざるを得ないかなと危惧しておりました。このような時期に学部としての標本展示室が創設されたことはこの上ない英断であったと思います。今後、学部教員が研究に用いた生物材料で展示できるようなものがあれば、順次展示し、収蔵標本のデータベースなども整備して、一層充実した標本展示室となるよう願ってやみません。

最後になりましたが、これまで温かいご交誼をいただきました先生方・事務系職員の皆様に御礼を申し上げ退職のことばといたします。



園芸農学科
教授 宇野忠義

農業総合研究所から弘前大学に転勤して14年。長いようで実に短く、やり残したことが多く、定年を迎え、無念さと多少の安堵感が入り交じます。農業に関する経済・政治・社会問題の教育・研究を専門としてきましたが、日本や世界の現実は難問を抱え、混迷

定年を迎えて 一残された宿題と安堵感

を深めています。それだけに社会科学の力による問題の解明と解決策が強く求められています。その中で、弘前大学でこそ得られた経験と最近の仕事について紹介します。

旧相馬村のリンゴ農家の募集に応じてリンゴの木のオーナーになって12年。冬期の雪上での剪定から始まり、気象や病虫害の影響を受けやすい開花期の受粉、花摘みなどの諸作業、数回の摘果から収穫、箱詰めまでリンゴ農家のお世話になり、見学、時には、作業の手伝いをさせていただいた。こうしたリンゴ農家の苦勞と並々ならぬ努力、研究心に間近に接しながら、一昨年末、『リンゴ農家の経営危機とリンゴ火傷病の検疫問題』（弘前大学出版会）を出版しました。

1990年4月、りんご果汁の輸入自由化以降、安価な果汁の輸入が増大し、加工用リンゴ価格さらには生果用価格が大幅に低落し、生産費を割り込み経営危機に至っていること及びその要因と背景を分析しました。また、原油の高騰など資材価格の高騰が重なり、明白なシェール現象による農産物（ことに米、果実）の恐慌的価値破壊についても分析し、青森県における農業危機の深刻さを解明しました。

こうした危機は貿易自由化との関連で発生しており、その根源には1995年に成立したWTO（世界貿易機関）体制の存在とそれがもたらす構造的問題を指摘できます。安全な食料の安定的な確保にとっても日本の農業経営危機は解決すべき重要な課題であり、生産



農学生命科学研究科
中村朝日

今回学園だよりの記事を書くにあたり、入学当初にも書かせていただいた

『気合』から得たもの

ことを思い出しました。当時の冊子を見ると『何事にも気合で取り組みたい』と意気込みが綴られていました。くすぐったく思いながらも、目標通りの学生生活を送れたと実感しています。

学部・大学院の両時代、私は実に周囲の方々に恵まれていました。サークルを立ち上げ全国集会に参加させていただいたこと、三年時から入ったサークルで学部・学年・国籍を越えて多くの友人ができたこと、希望の研究室に所属し尊敬する教授のもと精力的に研

究に取り組むことができたこと、学部時代の同輩と大学卒業後も支えあえる関係を築けたこと、研究室の先輩・後輩・他の研究室の同輩と多くの時間を共有することができたことなど、周りの人がいてこそこの学生生活で、非常に充実した日々を過ごすことができました。

『気合』で様々なことに挑戦した結果、多くの方々に会うことができ、そこで積極性と行動力を得ました。弘前大学に来たからこそ、私は成長できたと思います。たくさんの好奇心と様々な人々との出会いを与えてくれた弘前大学に、心から感謝致します。



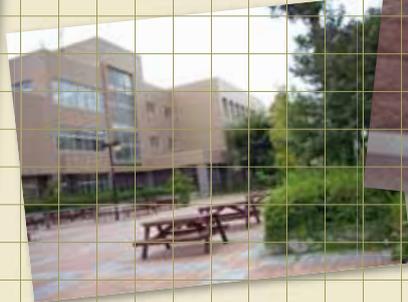
農学生命科学研究科
村松大輔

今年卒業する農学生命科学部修士2年の村松大輔です。私の進路決定について体験談を書きたいと思います。私は弘前大学に入学する前、大学受験の頃から研究職に就きたいと漠然と考え

私が進路を決めるまで

ていました。特に昆虫やカエルなど生物が好きで単純に生物系の研究をしたと考えていました。しかし、入学して1、2年生の頃はそれ以上具体的に考えることもなく遊びまくっていました。寮に住んでいたので遊び相手はいつも一緒にいたのです。寮の同期の友達と就職の話をしてはまだ何も決めていない奴も沢山いて安心してたのかもしれない。しかし3年生になり私は昆虫の研究のゼミに入り、そのときの授業の1つであった昆虫生理学の授業を受けて『これだ!』と感激しました。1、2年生の間に遊んでいたこともありこのままどこかの企業に就職してしまおう

かとも考えていましたが、その授業を受けて将来は昆虫生理学の分野で研究をしたいと考えるようになりました。その後、ゼミで論文を読んだり実験を通してますます興味を持ちました。私は来年には博士課程に進学する予定です。以上が私の大学での進路決定の流れです。はっきり言って自分から積極的に探して見つけたわけではなく、偶然今のゼミの先生の授業をとったからなのかもしれません。ただ1年の頃から漠然とでも職業を考えていたのも良かったのではないかと思います。まだ自分の進路を決めていない人は先延ばしにするのではなく、なるべく早い段階で漠然とでも決めて下さい。たいしたことはないアドバイスですが何か参考になれば幸いです。





法人内部監査室
室長補佐 **笹森 守**

弘前大学へ昭和42年4月に採用されて以降、この3月で60回目の誕生日を迎え42年を掛けて弘前大学を晴れて卒業することとなりました。振り返ればアツという間の42年でした。

思い起こせば、弘前大学での最初の配属先は養護教諭養成所で会計係員でした。当時、校舎は教育学部に増築中

昭和42年

で、事務室は教育学部の一室に間借りしており、私の机は事務長席のすぐ脇に配置されていて、終日緊張しっぱなしの毎日がしばらく続きました。

その後、係長以下3名の会計係が3階の一室に引っ越しをし、それから程なく養護教諭養成所の新校舎が竣工し、晴れて庶務・会計・学務の三係が一緒に真新しい事務室での仕事がスタートしました。

当時は教官も数名で、各行事等の節目では必ず教官と事務方の全員で飲み会が行われたものです。本当に家庭的で温かみのあった職場が懐かしく思い出されます。

この42年間を振り返れば、良き上司、同僚、後輩そして友人に恵まれたことに改めて感謝感謝です。

今後は健康の為に野球(還暦野球～古希野球)、バドミントンを生涯スポーツとして捉え、体力・気力が続く限り取り組んでいきたいと思っています。

弘前大学を去るにあたり一つ感じていることを申し添えたいと思います。

それは、特に法人化以降職場内におけるコミュニケーションが希薄に感じられることです。時代の移り変わりと言ってしまうとそれまでですが、現代はストレス社会です。ストレス解消のためにも、また職場内で気軽に意見交換ができる雰囲気作りの為にも、私が諸先輩方にして頂いたように、是非コミュニケーション等による交流を図って頂き、多忙の中にも活気に満ちた風通しの良い職場にして頂きたいものです。

弘前大学の益々のご発展と、皆様方の今後のご活躍を衷心より祈念申し上げます。

弘前大学に在職した想いで



総務部人事課
課長 **児玉 仁**

定年という時期を迎え、ひとえに上司、先輩、同僚、後輩の方々のご協力があったらこそと、感謝しています。

振り返ってみますと、昭和40年代の学生運動真っ盛りの中、学内は騒然とし、仕事をやる環境になかったことを思い出します。そんな激動の40年代から50年代が終わり、学内はだんだんと静かになっていくとともに、学内では、スポーツ活動が盛んになり、少しずつであるが明るい雰囲気が培われ、和気藹々の様相を帯びてきました。特に、野球、ソフトボール、バドミントンなど

の球技(バドミントンは「羽球」)が、特に教職員間で盛んになったのは事実である。

野球では、朝野球に没頭し県大会を目指し猛練習したこと、前日の飲みが明け方まで続き、その千鳥足で球場まで駆けつけ、試合に活躍したという猛者がいたことが、走馬燈のように思い出されます。また、ソフトボールやバドミントンでは、夏休みに職員レクリエーションの一環として部局対抗が開催され、各部局からあらゆる職の人たちが集い、敵を称え、味方を貶し、笑いあり、怪我ありのレクリエーションではありましたが、様々な人の「人なり」を知ったことで、その後の仕事の上で大変役立ちました。

また、50年代から農学生命科学部で開催され、その後大学行事(認知されいないが。)として「鱒ヶ沢駅～弘前大学」間を、夜通し歩く「50キロ」耐久歩も、人生が感じられた催しだったと思う。サポート隊とのバトルという「車に乗

りませんか。」といった甘い囁き・脅迫に惑わされながらも、必死に耐え続けた10何時間。

現在は、理工学研究科の学生さんが多く参加しており、その時参加した学生さんの感想で心に残った言葉は、桔梗野十文字から弘高下駅前に差しかかる坂の途中で発した「大学に早く行きたいと思ったのは、入学して初めて思った。」と言われたことである。それほどつらいものだったのかと、今でも私の心に残る名言(?)と思っている。

学生や職員の皆さん、こういうドラマが潜んでいる「50キロ」耐久歩に参加してみませんか!!人生が変わるかもしれませんし、変わらないかもしれませんが。勉強や仕事に日々追われる今日この頃ですが、そういった仲間との連帯意識こそが、弘前大学には不足していると思います。何かと一緒に挑戦し仲間を作ることこそ、今、一番望まれていることではないでしょうか。



医学部附属病院 看護部

千葉由起子

平成21年3月31日をもって定年退職をすることになり、39年間多くの方々のお世話になってまいりました。長い年月の間に様々なことがありました。当院が水害にあった時はちょうど準夜勤務の仕事でして。夕方の巡回時南糖グラウンドの向こう端から見間に増えてきた水かさがこちら側にせまり、気づいたら病院は停電し、廊下を流れる水の轟音と患者の悲鳴のみが聞こえ混乱状態でした。正面玄関待合口ピーの椅子がベッドと化し、避難してきた耳鼻科・整形外科患者が泣きわめい

退職にあたって

てまさに野戦病院でした。また恐れ多くも前吉田学長が教授時代の頃の教授達と看護部がソフトボールの対抗試合をしたことを思い出します。今では想像すら出来ないほど精神的にも経済的にも豊かな時代でした。

私的には新人の頃の重大失敗があります。深夜勤務の日、寝過ぎて目が覚めた時は交代の時間でした。混乱して何をすべきかがわからず布団の周りを3回も歩き回っていたのです。3日目になってやっと我に返り、支度をして寮から走り出し15分程遅刻しました。息も絶え絶え着いた病棟では、先輩がにこやかに迎えてくれました。携帯電話の無いあの時代、連絡をすることにも気づかない私を待っていてくれた先輩達に頭が下がりました。その先輩達に当時教わったことば「創意・工夫」という言葉でした。体験から獲得した先輩達のテクニックを盗みみて技術を獲得していったわけです。今では標準化に伴って、クリティカルパスの日常化・看護基

準の作成と、質保証に追われています。さらには看護必要度という言葉が定着しつつあります。ハイテク装置が増えている中で看護職の手による看護ケアの価値が益々高められているわけです。ヒューマンケアの提供が求められている今だからこそ、先輩から教わった「創意・工夫」という言葉を看護職員の皆様に贈り、患者一人一人に個別性の追求をして欲しいと思います。

振り返ってみますと60歳までは「生」への挑戦であったような気がします。「生」とは何か、生きるとはどういうことかを生意気ながらもずいぶん模索しました。これからは「老い」への挑戦です。いかにゆっくりと、そして美しく老いていくかです。この分岐点が定年退職時だと思っています。皆様とどこかでお会いした時ずいぶん老けたと思ったなら、それは老いへの挑戦が緩んでいる証拠です。叱咤激励をお願いします。退職にあたり、私をこれまで支えてくださった諸先輩の皆様や大学職員の皆様に心から感謝申し上げます。これからの大学、さらには大学病院の益々の発展を祈念いたします。



医学部附属病院 看護部

成田静子

私が入職した昭和45年頃は、4週4休半日4の体制で2人夜勤が始まったばかりの時期でした。旧3病棟3階の眼科病棟を始めとして第3内科、放射線科、混合病棟、第2内科を経験し、後の10年は、脳外科、皮膚科外来担当として勤務させていただきました。その間地震、台風、水害等災害に見回れた経験がありますが、一番の思い出としては、

退職を迎えた感想

昭和52年の土淵川の氾濫です。その日は準夜で、激しい雨音と、異様な物音に窓の外を見ると、当時病院と生協をつないでいた渡り廊下がメリメリと音をたてて流れて行くではありませんか、自然の猛威に鳥肌が立ったのを昨日の事のように思い出します。その当時の皆様の迅速な対応は、言うまでもありません。職員皆の団結で患者さんに最小限の影響で済んだのがなよりの出来事でした。ゴム手袋、長靴、前着姿で復旧清掃作業を行った事も今は懐かしい思い出です。楽しかった思い出としては、看護部自治会主催のレク行事です。子供も同伴できた、家族的で、より親密度が増し、仕事にも励みになったように思います。在職期間中に結婚出産育児を経験し、その子供も社会人となり、やれやれと思うこの頃で

す。現在は、勤務態勢も4週8休、夏期休暇、産休、育児休暇の充実、院内保育園設置と、子を持つ、働く女性にとって恵まれた時代になったなあーと感じています。

自分としては、39年間も勤務が出来るなんて思ってもいませんでしたが、仕事を続けている内に私の方が患者様の言葉に励まされ、支えられていると自覚するようになりました。

ここまで来られましたのも職場の上司はじめスタッフ皆様の御指導と御協力があったからと深く感謝しております。定年というひとつの区切りにはなりますが、これを新たなスタートと捉え何か目的を見つけて自分なりに歩んでいきたいと思っています。

男女共同参画社会となり、医療の進歩に伴い勤務も日々変化が激しく、厳しくなる一方ではありますが、皆様の健康と御活躍を心から応援しております。

Ⅲ 海外だより

多文化国家カナダを 肌で感じよう☆

人文学部
現代社会課程4年

三村 香織

私は、2007年8月～12月の4ヶ月間、カナダのカムループスという町に留学していました。カムループスという町は、太平洋側にあるブリティッシュ・コロンビア州の南に位置する町です。州都バンクーバーからは、飛行機で1時間、長距離バスで4～5時間くらいです。

私が、カムループスに到着した時の第一印象は、「全てがなんて広いんだ！」でした。みなさんご想像の通り、カナダは「広大な自然」というイメージがありますが、まさにそのイメージ通り、自然は豊かで（日本と規模が違います）、道路も家も全てが広々としていて、とても開放的な気持ちになりました。私が現地で最初に出会った方は、私を空港まで迎えに来てくれたホストマザーと小学生のホストシスターでした。ホストマザーは、フィリピンからの移民の方で、とても陽気に私を迎え入れてくれました。

このように少々興奮気味な精神状態の中、私の留学はスタートしましたが、しばらくすると、ある「違い」とまどい始めました。その「違い」とは、まず「コンビニがない！」でした。日本では、新しい土地に足を運んだ際まず近くにコンビニがあるかを気にしていたので、カムループスでも同じように



カムループスにあるRiver Side Parkです。水面に反射した山々が絶景です。これは、9月くらいに撮影したのですが、このときここで海水浴(?)している人たちもいました。

コンビニを探しました。しかし、30分経っても1時間たっても一向に見つかる気配はありません。その日は結局見つけることができず、私は少々不安になりました。更に、時間の感覚にも驚きました。日本にいるときは、夜遅くまでテレビを見たり友人と遊んでいたりしていましたが、カナダではホストファミリーは朝方中心の生活だったため、夜はとても静かだったのです。日本にいたころの騒がしさがちょっとだけ懐かしくなりました。それに時差ぼけもあいまって、数日間は不安でいっぱいでした。

しかし、学校が始まると、このような不安たちは吹き飛びました。学校には、様々な国籍の留学生がいてとても刺激的だったので、コンビニの必要性もそのうち感じなくなり、夜も快眠で、とても健康的な生活を送れるようになったのです！私の通っていたトンブソン・リバーズ大学は、多くの留学生を受け入れており、約700名の留学生が世界各地から来ていました。ここでは留学生は、英語を学ぶだけでなく、英語で専門的なことも学ぶことができたので、短期留学生だけでなく長期留学生も滞在していました。私は、前者の英語を学ぶプログラムに参加していたので、ネイティブの学生よりも、留学生と親しくなる機会が多かったように感じます。

その中でも思い出深いのは、学校始業日に隣の席に偶然座った中国人の子と仲良くなったことです。彼女は、後に私のホームステイ先のルームメイトになり、とても親しくなりました。彼女とは、本当にたくさんのことを語りました。お互い片言の英語で、自分の趣味や国のことや恋愛のことを話したり、よく買い物にも一緒に出かけたりしました。帰国後も、連絡を取り合っています。時には言い争うこともありましたが、この経験を通して、自分の意見をしっかり相手に伝えながら、相



Ⅳ 言語力コンテスト

第4回 弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト I 文学作品部門

「言語力」とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第4回コンテストの受賞作品から部門I「文学作品部門」の優秀賞を掲載します。



優秀賞 理工学部2年 佐久間 愛 香さん

彼女は海に帰った

僕が小学校六年生の時、同じクラスには人魚がいた。

東北だかどこだかから転校してきたという彼女は恐ろしく色が白く、初夏だというのに早くも真っ黒に日焼けしたクラスメイトたちの中で異様に浮いていた。かわいい女の子だった、のだと思う。あくまで今思い返してみればという話だ。その頃の僕たちはガキで馬鹿でどうしようもなかったから、彼女の子供らしからぬ突出した美しさはこの目には異端にしか映らなかったのだ。

彼女はいつも一人だった。別にいじめられていた訳ではない。僕たち男子だけでなく女子もまた、自分たちと彼女との相違に気付いていたのだ。誰もが彼女を異国から来た旅人のように扱った。興味はあるが話しかける勇氣はないが、皆彼女のことを遠巻きに意識していた。ごくたまに彼女との接触を試みる者も現れたが、大抵それは失敗に終わった。何を話しかけても反応が乏しいのだ。話しかけた者たちはいつも裏切られたような失望を抱き、そのうち誰も彼女と会話をしようとは思わなくなった。

そして彼女をさらに孤立させていたのはその首に巻かれた布だった。なぜか彼女は常に首に何かを巻きつけていたのだ。そのかわいらしいスカーフやマフラーが、どんなに暑い日でも露出を嫌うかのようにきっちりと彼女の首を覆う。小学生のおしゃれにしては異様だ。僕たちはそれに余計、想像力を

かき立てられた。ある者は「あのマフラーを取ったら首がもげるに違いない」と大まじめで言い、それを聞いた別の者は「その取れた生首が空中を飛んで追いかけて来るに違いない」とふざげ半分で言った。

頭が飛んで来るのはまあ冗談としても、一体何の理由があってあんなに暑苦しいまねをしているのだろう。友人たちはさらに馬鹿な想像をして笑いころげていたが、僕は純粋にその理由が気になって、彼女と二人きりになったのを見計らい直接聞いてみた。

彼女は一瞬迷うようなそぶりを見せた後、ささやくように言った。

「誰もしゃべな？」

誰にも言うな、と最初に釘をさしているのだと気付くのに数秒要した。僕はあわてて首を縦に振った。初めて聞く彼女の声は想像以上に細くてかわいらしく、聞き慣れない東北弁はどこか異国の神秘的な言葉に聞こえた。

彼女がマフラーに手をかけた。僕は緊張して見ていたが、ふと友人の言った「首がもげる」という話を思い出した。好奇心と同等の恐怖も襲ってきたが、今さら後には引けない。僕は意を決して彼女の首を見つめた。

ぱらりとマフラーが解けて現れた白い首筋に、光るものが一瞬見えた。もっとよく見ようと目を凝らすと、彼女が素早くマフラーを巻き直す方が先だった。

あれは一体何だったのだろう。彼女の首にきらりと、そう、クラスの子が手芸で使っていた平べったいビーズ

のようなものが張り付いていたように思える。何だろう、もっと、こう、どこかで見たような……あ。

「う、うろこ？」

僕が言うと彼女は何も言わずに笑った。今でも覚えている。それはひどく美しく、静かな笑みだった。

「人魚姫って知ってる？」

唐突に彼女は言った。僕があわててうなずくと、彼女は頬をゆるめた。

「あれ、うちのあば」

「あば？」

「ん、おばあちゃん」

照れたように笑って教室の外を見た。僕も何気なく彼女の視線の先を追う。放課後の校庭で騒ぐ下級生の声が聞こえる。しかし彼女はそんなもの気にも止めていないようで、もっとずっと遠くを見つめていた。しばらくそうしていたが、やがて急に僕のことを思い出したかのようにこっちを向き、静かに語り出した。

「人魚姫は最後、泡さなって消えてしまうでしょ？」

「あ、ああ」

正直人魚姫の話はあまり覚えていなかったが、僕は必死に話を合わせようと相槌を打った。確か物語の最後、泡となって溶けそうになった人魚姫が天の遣いとかいう人たちに空に連れて行かれるのだったか。小さいころに「おいしい、何だそれ」と思った記憶がある。

「だけど人魚姫は生まれ変わったんだって」

心持ち楽しそうに彼女は言った。



「それがうちのあば」

「君の、おばあちゃん」

こくんとあばは、あまりに話が飛躍しすぎて、当時大人たちから「子供ばなれした論理的思考を持つ」と言われていた僕には、いまち理解しがたかったが、彼女がとてもうれしうなので反論できなかった。それどころか、もしかしたら本当かもしれない、本当だったらいいなとさえ思ってしまった。そうさせるなにか不思議な魅力が彼女には備わっていた。

「誰さもしゃべな？」

はにかみながら言う彼女の言葉は、まるで呪文のように僕の耳に吸い込まれた。

僕は自分だけが知る彼女の秘密を、決して誰にも言うまいと誓った。まるでとっておきの宝物を手に入れた時のように、妙にわくわくしてうれしかった。彼女の声があんなにかわいらしいことを、マフラーの下に隠された首がきちんとつながっていることを、はにかむとすぐ子供らしいことを自分だけが知っている。

今まで通り教室で堂々と話しかけるようなことはしなかったが、僕はその日からいつも彼女のことを意識していた。なるべくなら彼女に格好良いところを見せたいと、柄にもなくそう思っていた。

ある日のプールの授業の時、彼女はいつも通りプールサイドの木陰で見学していた。首にはやはりスカーフが巻かれている。体が弱いという理由で、彼女はいつも授業を見学していた。だが人魚の彼女が泳ぎたくない訳がない。そう僕は解釈していた。そこでせめて彼女が楽しい気分になれるように、そして同時に自分の格好良いところを見てもらおうと馬鹿な僕はできもしないのにバタフライに挑戦した。

溺れた。生まれて初めてだ。泳ぎは

それほど苦手じゃないと思っていたのに。足が底にとどかない。鼻からも口からも塩素臭い水が浸入してくる。分からない。もう何も分からない。

暗くなりかけた視界の隅に見たものは、プールサイドであわてる担任教師と、その横を駆け抜け華麗にプールに飛び込んだ、彼女の姿。

僕が保健室で目を覚まして教室に戻ると、なぜか彼女の姿が見えなかった。隣の席の女子が、無理して泳いだら具合が悪くなったらしく帰宅した、と教えてくれた。僕の友人たちのグループはなぜか騒然としていた。皆の話を聞いていて何となく事情を察した。彼女が僕を助けにプールに飛び込む際、首のスカーフが取れたというのだ。「誰だよ首もげるって言った奴」「もげる訳ねえ」「馬鹿だな信じるなよ」首のうろこには誰も気付かなかっただけだ。僕は少しほっとした。僕のせいで彼女の正体が皆にばれてしまっただけだ。

それにしてもあいつ泳ぐの速かったよなあ、と誰かが言った。フォームもきれいだった、とスイミングスクールに通う奴が答えた。だが悔しいことに僕は溺れている最中で、彼女の美しい泳ぎを見ることができなかった。やりきれない悔しさと、彼女に助けをもらうことができたという何とも言えない喜びをかみしめているうちに、話題は次のオリンピックに出る水泳選手のことになっていた。だから隅の方で腑に落ちないというように一人がつぶやいた言葉は、僕の耳にしかとどかなかった。

「でも、首にうろこみたいのが見えただよなあ……」

それから数日して夏休みが訪れ、僕は彼女に助けをもらったお礼を言いそびれてしまった。やきもきしながら一

カ月が過ぎ、休み明けに喜び勇んで学校へ行ったが、彼女は教室に現れなかった。休み中にまた東北の方に引越してしまったという話を聞いたのは、そのしばらく後になる。

そしてなぜ僕が唐突にそんなことを思い出したのかというと、同窓会で10年ぶりに再会した面々の中に彼女の姿がなかったからだ。

「ああ、あいつ自殺したらしいよ」

懐かしそうな顔で隣に座る友人が言った。「スカーフを取ったら首がもげる」と一番最初に言い出した奴だ。

「え、何で？」

ビールをコップに注ぎながら、髪の毛なんか茶色に染めてすっかり垢抜けてしまった友人は言う。

「なんか東北の方に引越しただろ。」

そこで中学の時にふらりと海に入って帰って来なかったんだって。俺も最近知ったんだけどさ、と言う彼に僕は言葉を返せなかった。

いじめだの親の離婚だのとあやふやな原因を推測する友人たちをよそに、僕は一人彼女のことを思い返す。泡となって消えた人魚姫のごとくこの世から消え去った彼女のことを。細い声、かわいらしい笑顔、そして細い首に浮かぶうろこ。僕が一瞬だけ垣間見ることができた彼女の素顔。あの時の彼女は、少なくとも僕にとっては間違いなく人魚だったのだ。自ら海を飛び出て人間の中に紛れ込んだ一人の人魚。僕しか知らない彼女の秘密。

ああ、なるほど。僕は一人理解する。

「何で死んじまったんだらうな」

そう言う友人たちに僕は教えてやらない。彼女は死んでなんかないということ。

彼女は海に帰ったのだ。

僕は無くした宝物を再び手に入れた子供のように微笑んだ。

講評

「僕が小学校六年生の時、同じクラスには人魚がいた。」という書き出しに、まず心を引かれました。この先の物語の舞台に、普通の小学校六年生の世界とは違ったメルヘンがありそうな気がしたのです。読み終わったとき、その期待はある程度満たしてもらえたように思いました。読む人に、ふと子供のころのかすかな恋心呼び戻してくれる大人の童話とでもいったところでしょうか。

人魚の話す東北弁のお粗末なのが残念でした。方言にも女性語はあるのですから、会話にもうちよっと留意すれば、作品全体の品位がアップされたでしょう。

V 新任教員自己紹介



人文学部

思想文芸講座 講師 **横地徳広**

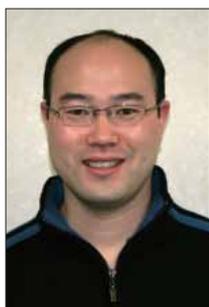
はじめまして。西洋倫理思想史の担当として着任しました横地です。

もともとはカントの認識論や美学の勉強をしていたのです

が、一念発起してレヴィナスの倫理学にかんする研究へと転換、とはいえ、その関連でハイデガーによるカント解釈を集中して取り上げることとなり、今

ではカントの倫理学にかんする研究へと戻りました。

不慣れな点が多いと思いますが、よろしく願いいたします。



理工学部

物理科学科 助教 **任 皓駿**

理工学部物理科学科に新しく来た任皓駿(イム ホジュン)と申します。専門分野は物性物理です。少しい詳しく言うと、放射光を用いた分光法による強相

関電子系の物性を研究しています。名前から気付いたかもしれませんが、韓国人で、6年前、日本に来ました。弘前大学の皆さんと、興味深い物性物理の世

界にはまって見たいです。よろしく願いいたします。



農学生命科学部

分子生命科学科 准教授 **園木和典**

現在の社会では、自ら情報収集に動くこと、情報発信すること、多くの人と連携できることが重要だと思います。特に私の研究分野(資源利用)では求めら

れます。どれも大変なことです。馴れ合いではなく「君とならやろう」と言われる関係、「この人と仕事がしたい」と思える出会いのためには必要なことと

思います。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」、無意識に実践できるように成長したいと感じる今日この頃です。

VI けいじばんコーナー

1 平成20年度弘前大学学位授与式

- 学部 日 時：平成21年3月24日(火) 午前10時00分～
場 所：弘前市民会館 大ホール
- 大学院 日 時：平成21年3月24日(火) 午後1時00分～
場 所：弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール

2 平成21年度弘前大学入学式

- 学部・第1部(人文・教育)
日 時：平成21年4月7日(火) 午前10時30分～
場 所：弘前市民会館 大ホール
- 学部・第2部(医・理工・農生)
日 時：平成21年4月7日(火) 午後1時00分～
場 所：弘前市民会館 大ホール
- 大学院 日 時：平成21年4月7日(火) 午前9時00分～
場 所：弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール

「第2回 学生相談を考える会」を開催

12月22日(月)、学生相談に携わる学内外の教職員を対象にした「第2回 学生相談を考える会」を総合教育棟101講義室において開催した。約70人が参加し、学生を支えていく体制の在り方を探った。

同会は多様化・複雑化する学生相談に適切に対応し、学生の支援体制を充実させようと、9月に初開催。2回目の今回は近隣の他大学とも連携、情報交換していこうと呼び掛け、東北女子大、県立保健大など7校からも約10人が参加した。

メンタルヘルス研究協議会(四年に一回の全国協議会)の報告及び今後の展望を述べた後、意見交換を行い、「精神的な問題で、ほとんど授業に出てこない学生に、どう対処すればいいのか」など、現場の苦勞を訴える声が多数上がり、対応の仕方についてカウンセラーに具体的なアドバイスを求めている。



学生相談の事例について検討する各校の教職員ら

●2008年12月6日(土)、人文学部国際協力ゼミの学生・近藤麻衣さんらが、弘前大学出版会から『津軽から発信！国際協力キャリアを生きる JICA 編』というブックレットを出版した。この本は朝日新聞全国版教育面「究める」(2009年1月5日、15面)をはじめ、新聞各紙でも取り上げられるなど反響を呼んでいる。

ブックレットでは、青森県で国際協力を携わる3名を取り上げ、それぞれのキャリア作りを中心として話が進んでいく。学生の皆さんなら“自分の将来”について悩んだ経験が少なからずあるだろう。この本には、人生の先輩方がどのように青森から国際協力を発信していったのか、その道筋が描かれている。編者4人は、「国際協力のキャリア作りを軸にブック

レットを編集したが、現在、就職活動を行っている学生や将来に悩む学生にも参考となる本。私たちも就職活動を通して、キャリア作りには自己の戦略と、他者とのご縁が重要な要素を占めていると気付いた。是非、就職活動や将来に悩む学生の皆さんに読んで欲しい。」「それぞれのお話の中から、キャリアの作り方に決まった形はないことや、自分の行動ひとつで可能性が広がることを感じ取っていただきたい。」と語る。大学生であることの価値を、皆さんがどう捉えるか楽しみな一冊だ。

人文学部国際協力ゼミ

赤平大寿 近藤麻衣 富岡昂 吉田美沙都

表紙のイラストについて

オオカミが三匹の子豚を探しているよ
でも定住するほどお金を稼げないので
三匹の子豚はネットカフェ、漫画喫茶

ファストフード店で寝泊まり中・・・
オオカミすっかり困り顔。どうしよう
このままじゃ物語が成り立たない・・・

「三匹の子豚 2009」

制作 教育学部学生 今 友里華

Ⅶ 編集後記

学園だより162号をお届けします。本号の特集は「卒業・修了・退職にあたって」です。3月号は毎年この特集を組んでおりますが、今年も、卒業される学生の皆さんやご定年を迎えられる教職員の方々から多くの原稿をお寄せいただきました。ご協力いただきました執筆者の皆様へ厚く御礼申し上げます。

ところで、編集委員会の仕事のひとつに原稿依頼がありますが、お忙しい日々をお送りの方々をお願いするわけですから、ご無理を申し上げてお引き受けいただくということも稀ではありません。そのような中、自分たちで編集した本をアピールしたいということで、今回、人文学部の学生さんが積極的にコンタクトを取りに来てくれました。「けいじばんコーナー」という限られたスペースでの紹介となりましたが、編集委員会としてはこのような申し出を歓迎しますので、他の読者の方も、本誌を自由な発表の場として大いに活用してほしいと思います。(K.F)

弘前大学ご卒業をお慶び申し上げます

弘前大学ご卒業をお祝い申し上げます。

ご卒業後、弘前大学で学び活躍されたことを肴に盛り上がる場面も多いと思います。その時はぜひ日本酒「弘前大学」をご相伴いただくことをお願い申し上げます。特に平成21年は弘前大学創立60周年を記念し、日本酒「弘前大学大吟醸」を500本限定で販売予定ですので、お早目のお申込みをお待ちしております。今後の皆様のご活躍をお祈り申し上げます。



「弘前大学大吟醸」 ¥3,200 (3月中旬発売予定)



「弘前大学」オリジナルグラスセット ¥2,800

●日本酒「弘前大学」及び「大吟醸」は弘大生協サリジェ のみでお求めいただけます。

弘大生協サリジェ店 Tel 0172-34-4622 Fax 0172-34-4623 【担当】 担当 佐藤、川村

在学・在任中のご利用に感謝いたします

ご卒業やご栄転などで弘前大学を後にする皆様に、これまでご出資していただいたこと、沢山ご利用いただきましたことを深く感謝いたします。生協はこれからも学生や教職員組合員に支えられて成長できるよう頑張ります。ご来弘の機会にはぜひお立ち寄りをお願いいたします。

【重要】

出資金返還手続きのお知らせ

生協ではただいま、出資金の返還手続きを案内しています。まだ手続きをされていない方はお忘れのないようお願い申し上げます。また、院への進学などで、引き続き組合員としてご加入いただく場合も、身分変更手続きが必要です。

- ①店舗で「出資金返還&身分変更申込用紙」に記入し手続きをお願いいたします。
- ②出資金返還は振込となります。5月末まで有効な金融機関口座を申込書にご記入下さい。
- ③3月末までの手続き者は、5月25日(月)付けでの振込による返還となります。

環境ポスター最優秀賞決定！

環境マネジメントシステム「K E S」審査登録の完了を記念し募集した「環境ポスター」の最優秀作品が決定しました。

- 応募作品数 7点
- 審査方法 生協理事による投票
- 審査結果

最優秀	長村浩平様
第二位	匿名希望様
第三位	蝦名美奈様



(最優秀 長村浩平さんの作品)



弘前大学 学園だより Vol.162

2009年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail: jm31113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課



国立大学法人 弘前大学 「学園だより」編集委員会

委員長

山本秀樹(教育・学生委員会)

委員

福田健太郎(人文学部)

菅田貴子(教育学部)

松谷秀哉(医学研究科)

扇野綾子(保健学研究科)

小松尚夫(理工学研究科)

比留間潔(農学生命科学部)

三浦信義(学生課)

佐々木忠(学生課)

印刷：ワタナベサービス株式会社